

『 禅のころ - 曹洞宗 - 』

かい みよう
戒 名

平成28年12月第2週放送

私たちの一生について回るもの、それは自分の“名前”です。自己紹介や署名をする時などのあらゆる場面で、自分自身を表すものとして、名前を使います。私たちは、生涯名前を使うものですから、私たち自身の名前は、生まれながらに持っているもののように感じられることもあるかも知れません。

しかしながら、生まれたその瞬間から名前を持って生まれてくる人はいません。私たちの名前は、いただいたものです。生まれてきた子供に対して、両親や周囲の人々がその子供の成長を祈り、希望を託して“名前”を付けます。

それを受け止めて自分のものとしているのが、私たちのそれぞれの“名前”です。自分のものと言いながら、“名前”は周囲の人との『縁』によっていただいたものなのです。

名前を使う場面もまた、周囲の人との関わりの中にあります。自分がたった一人で生きていたとすれば、名前を使う必要もないでしょう。そういった意味では、名前を持つということは、周囲の人、ひいては社会とのつながりを表すものともいえると思います。他の人との交流の中で、自分の名前を相手に伝えるとき、私たちは名前を改めて意識し、自分の名前を付けてくれた人たちが、それに託した希望や願いに気が付くことになるでしょう。

一般的に、私たちの身近で大切な方も自分自身も、いつの日にか、仏教の戒律を授かり、^{ほとけ} 仏としての道を歩み始める時を迎えます。その時の“名前”が、「^{かいりつ さす}戒名」です。

「戒名」は、^{ぼだいじ} 菩提寺の住職に、新たに^{ぶつえん} 仏縁を結んだ^{あかし} 証として、授けてもらうものです。住職は、その人のことを思い、^{ひとがら} お人柄や、これから仏様としてどのような思いを託すべきかを深く考えながら、仏様としての“名前”である「戒名」を授けるのです。

自分の大切な人の「戒名」について、また外ならぬ自分自身の「戒名」について、自分が元気な間に、菩提寺の住職さんとお話しをしておくことも大切なことではないでしょうか。

— 終 —